

プロローグ

目を開けた瞬間、私は息をのんだ。

窓の外、夏の雨が降る前触れのような、あの湿った空気。見慣れた私の部屋。窓から見える忌まわしい街並み。目の前の机の上からは、昨日書いたはずの、彼を救うためのあらゆる可能性を記したメモが、きれいさっぱり消えていた。

まただ。

私は……泣いていた。もう何度目なのかも分からない。何度ループしても、気がつけばいつも、あの日、あの朝の自分の部屋に戻っている。それだけなら、まだ耐えられる。だけど、この繰り返しには一つの結末が待っている。

大好きな、彼が死ぬ。

どれだけ足掻き何度方法を変えても、電話連絡、事故現場、病院のベッド。必ず、彼は私の目の前から消えてしまうのだ。初恋の人。告白すらしていない。彼が私に、ほんの少し笑いかけてくれるだけで、胸が痛くなるほど嬉しいのに、

神様は残酷にも、その笑顔を奪い去る。事故、事件、病気や、急な心停止まで。死の形はいつも違うのに、結果だけは決して変わらなかった。

「もう……いやだ」

ループが始まった最初のうちは、救えると思っていた。タイムリープをして、未来を知っているのだから、彼に注意を促し、予定を変えさせ、違う道を通る。ありとあらゆる可能性を探った。それなのに……すべて無駄だった。

数え切れないほどの、やり直しを経ても、必ず同じ日時が訪れれば彼は死ぬ。

何もできない無力感に押し潰され、私は何度も膝を抱えて泣き続けてきた。

「どうして……どうして私ばかり覚えているの……？」

誰にも相談できない。この地獄は、私ひとりだけのものだった。それでも、諦めることはできなかった。だって私が、思いを寄せる一番好きな人だから。

それは、もう十数回目のループだったと思う。私の心は疲れ果て、何をしても無駄だと知りながら、それでも彼を見捨てられず、必死に走り回り続けた時。

ポツリポツリと、突然降り出した雨。

「ねえ！ 雨宿りしよう！」

「わ、わかった。そうしよう」

「ここがいいよ！」

今日は彼が死ぬ前の日の夜。あらゆる偶然を装って、彼と二人きりになった。雨宿りのつもりで入った、安ホテルの一室。狭い物置のような小さな部屋で、二人して笑い合い、その彼の素敵な笑顔が、どうしようもなく愛おしかった。

でも明日、また死んでしまう。そう思ったら、涙があふれて止まらなくなる。

「どうしたの？」

彼が驚いた顔で私を覗き込む。だけど気づけば、私は彼に抱きついていて、抱きついたまま、声を殺して「お願い、死なないで」と震えて縋った。

「ど、どうした？ 急に？」

自分が死ぬことを知らない彼は困惑し、ぎこちなく背中に腕を回してくれた。どうせ死んじゃうのなら、私は彼に抱かれないとそう思ったのだ。次の瞬間、私から唇を重ねた。正直に言う、私は地味な女の子の部類。彼からすれば、女友達程度の人。どうして、そうしたのか分からない。でももう、私の体は止まらなかった。彼の温もりに触れたら、黙って失うなんて耐えられなかった。

「おねがい！ 抱いて欲しいの！ 一度でいいから！」

今まではただ命を救う事に必死で、恋愛の流れに持っていた事なんて無い。

だけど、その夜。私は十数回のループを繰り返して、初めて彼と身体を重ねる。

「いいのかい？」

「うん」

初めての事で、やり方も分からぬ私は、涙でぐしゃぐしゃになりながらも、必死で彼を求めるしかなかった。彼は優しく、不器用で、何度も「大丈夫？」と聞いてくれた。私は、ただ彼が愛おしくて、怖くて何度も彼の名前を呼んだ。彼の優しい指使いで、私の体の奥から波のような快感を呼び寄せる。

そして……私は、生まれて初めてのセックスで、初めての絶頂を迎えた。

翌日。運命の日。

驚いたことが起きた。本来なら彼がもう死んでいるはずの時間を過ぎても、私たちは一緒に過ごしていたのだ。私の髪をかき揚げ、笑顔を向けてくれる。

「……え？　うそ……」

私は何度も時計を見返した。心臓が破裂しそうなほどに鼓動が一気に高鳴る。死ぬはずの時間を過ぎてても、彼は生きているのだ。

まさか……ループを突破した？ トリガーは肉体関係？

これは荒唐無稽な仮説だけど、それ以外に説明がつかない。私は歓喜した。突然、愛する人との未来が訪れたのだ。私は震える指先で、彼にそつと触れる。そのぬくもりが確かに生きていることを示していて、堪えきれず涙をこぼす。

「ううう、よかった……本当に、生きてる……」

「馬鹿だなあ、当たり前じゃないか」

「うん。そうだよね！　そうだよね！」

突破したんだ。そして私も、もう、あの地獄のような朝にループしてない。

「なあ、俺達、恋人になったって事でいいんだよな？」

「うん。恋人にしてくれるの？」

「君がなってくれるならね」

よかった。これでハッピーエンド、彼は死のループから抜け出せるだろう。

その日、幸せをかみしめながら、彼と過ごしそれぞれの家路についたのだった。

だが、その幸せな現実は次の日に崩壊してしまう。なんと次の日の同じ時間。

12

また……彼は事故で死んでしまったのだ。そして私も、戻るべき日の次の日に、タイムリープしてしまった。見慣れた部屋、窓の外は見慣れた町並み。

「嘘だ……。だって、ループは終わったはずなのに」

そんな確証はなかったが、本当に私は彼と次の日を生きたはず。それなのに、
また彼は死んでしまった。一日だけ進んだ過去へと戻り、私はまた絶望に叩き
落とされたのだった。

第一章 命を伸ばす方法

でも、絶望だけじゃない。

一日だけでも、彼を延命出来た。絶望ではあるものの、一筋の希望が現れる。メンタルは崩壊寸前だけど、彼を救える可能性と、絶望の中に光が見えた。

体を重ねた後で、彼の寿命が延びたのは事実。だけど、1日後に彼は死んだ。体を重ねる。それだけが、彼を生き延びさせる、たった一つの私の望みになる。

そしてまた、彼が死んでしまう日に戻り、私は彼を誘って体を重ねてみた。
このまま行けば……彼はもう一日は生き延びるはず。私はそう思っていた……。
なんと彼は、その次の日の、その時間になると死んでしまったのである。

「……体を重ねれば延命するはずなのに、なんで……」

どうやら……ただ体を重ねただけでは、彼は死んでしまう事を知る。

なにがある？ 最初に体を重ねた日と違うのは何だ？

また、机の上にメモが散乱する。ペン先で紙を突き刺すように走らせた字は、もはや自分でも判別できないほど滲んでいる。

―体を重ねたら、寿命が延びた―

―でも……次の日に死んだ―

―その差異はなに？―

「どうということなの……？」

私は額を押さえ呻く。絶望と希望の境界線を何度も歩かされているみたいで、頭がどうにかなりそうだった。でも、次のループ。私はなんとか勇気を振り絞って、また彼と夜を過ごす事にしたのだ。

そして一度、体を合わせたあと、ゆっくり体を起こして彼の首に腕をまわす。

「あの、また、しよ」

「えっ……また？　まあ、彼女になったんだしね。いいよ」

「う、うん。もう一回……ね？」

彼は照れくさそうに頬を搔いた。純情な彼を無理やり誘っているみたいで、心が痛む。けれど、何かを変えなければ彼は死んでしまう。そしてその夜は、二度ほど体を重ねてみた。でも私は心のどこかで素直になる事が出来なくて、気持ちを委ね切れず、ぎこちないエッチで終わってしまった。

「はあはあ。どうだった？」

「う、うん。気持ち良かったよ」

彼に嘘をついた。私は彼の命の事が気になりすぎて、感じていなかった。

そして翌日になると、彼はやはり死んでしまった。

「ちがう……ただ抱き合うだけじゃダメなんだ……」

体を合わせてから何度目かのやり直しで、私は震える手でメモに書き足した。

―初めてのエッチ。感動？ 感じた？―

―最初の時だけ、私はイッた？―

―最初のエッチだけ、彼は翌日まで生き延びた―

「エッチではなく、エッチの内容？」

「まさか……そんな、馬鹿げた……」

でも他に思いつかない。それ以外に説明がつかない。

私の、絶頂？　それが鍵？　まさかね……。でも……。それくらいしかない？

秘密がわからぬまま、次のループがくる。私は決意してまた彼を誘った。

「ね、ねえ……。ちゃんと……。最後まで、してほしいの」

「え？　最後まで？　また、エッチしたいの？」

「うん。私が……ちゃんと、気持ちよくなりたいの」

彼にとっては、私と初めてエッチをした次の日、毎日誘ってくると思ってる。

私も自分で言って、顔が真っ赤になる。恋人になったばかりなのに、こんなに積極的に迫るなんて。彼からすれば、付き合って二回目のえっちなのに……。

私は、もう何度か繰り返して来た事だ。彼は戸惑い、視線を泳がせる。

「お、おう……もちろん……頑張るよ」

彼の不器用な言葉に、胸がじんと熱くなった。そしてその夜。私は意識的に、彼の指を、唇を、奥まで求めてみる。

「もっと……そこ……」

「だ、大丈夫か？ 痛くないか？」

「うん……いいの、もっと……」

出来るだけリラックスするようにして、彼を全面的に受け止める。

「かわいいな」

「嬉しい……もつとしたいようにしていいよ」

「こんなに、君が大胆だなんて思わなかった」

「う、うん……」

くちゅ♡ くちゅあ♡

初めての時より、彼は大胆になってくれた。こちらが大胆になればなるほど、彼は私の体を楽しむようになった。肉褌の割れ目にそって、指をくちゅくちゅ

と上下させ、クリトリスを優しく愛撫してくれた。

「あっ ああ んはあ
♡ ♡ ♡」

凄く気持ち良かった。羞恥で消えそうになりながらも、私は必死で感じた。絶対にイかなきゃ、彼を救うために。やがて体の奥から、波が押し寄せてくる。それに気づいた彼は、ぎこちないながらもクリトリスを素早く弾いてくれる。

びくっ！ びくっ！

「あつ！ あつ！ 悠馬くん！」

思わず彼の名を叫ぶ。

くりゅくりゅくりゅ。

クリトリスを弾く彼の指に、一気に快感が盛り上がって来る。